

<紙面直言>

尾引く甘い歴史認識—権力と報道の関係に教訓

ソ連・東欧革命が如実に示したように、世論とマス・メディアが結びついたとき、鉄壁を誇る絶対権力をも打ち砕く巨大な力となる。日本でも田中元首相はじめ何人もの権力者がマスコミと世論の力で倒されてきた。ロッキード、リクルート両事件はもとより、今回の共和リゾート汚職摘発でもマスコミの果たした役割は大きい。

現代社会では、政治的民主主義は自由なマスコミの存在によって保障されている。マスコミの発達なくして今日のような民主主義の発展もなかった。同時に、権力者にとってマスコミは政治的演出や政策宣伝のための強大な武器ともなる。マスコミの巧みな利用によって権力基盤をより強固にすることもできる。

したがって、権力はマスコミを恐れる一方、これを操作したい誘惑にかられる。マスコミにとっても権力は最大の情報源の一つであり、できれば権力の中枢に肉薄し密着したい衝動にかられる。こうして権力とメディアは別々の思惑から互いに接近し密着する。

密着と癒着の間の質的距離は大きい、量的な距離はない。イトマン事件で多額の金品を受け取ったとされる新聞記者や雑誌記者は、誘惑にまけて聖なる壁を越えてしまった。リクルートや証券不祥事の際にも、マスコミ関係者の名前があがった。信じたくないことだが「マスコミ汚染」も結構根が深いと見られている（本紙1月19日）。これは権力をチェックすべきマスコミが、一つの権力になってしまっているからではないか。

いま米国のジャーナリズムに無力感が広がっているという。湾岸戦争の報道で軍の情報操作をつき崩せなかった反省からである。そして戦争終結1周年を迎えるいま、戦争の隠された部分が少しずつ明るみに出され、あの戦争への懐疑的議論が起り始めている。ブッシュ大統領を90%の国民が支持したあの熱狂はどこへ行ってしまったのか。そもそもあの熱狂は何だったのか。改めて権力と報道の関係に重い教訓を残した。

日本にも同じようなことがある。昨年末、真珠湾攻撃50周年に合わせて戦争と報道をめぐる回顧記事があったが、マスコミの反省の甘さが今も尾を引いているように思える。

最近、日本人の歴史認識がいろいろな形で問われており、マスコミも韓国・朝鮮人、中国人の強制連行や従軍慰安婦の問題を大きくとりあげ始めた。しかし余りにも遅いのではないか。中国残留孤児問題でもそれを思った。あと10年、20年早かったらどんなに多くの人々が救われたことか。

マスコミの追う「いま」は刹那(せつな)的な今になりがちだが、求められているのは歴史のなかの「いま」なのだ。近隣諸国への戦争責任をあいまいにしてきたことが、21世紀へ向かう日本の足かせになっている。政治とマスコミの責任は大きい。同時に、それは私たち自身の重い課題でもある。結局、私たちは自らにふさわしい政治しか持てないと同じように、自らにふさわしいマスコミか持てないのだから。